

2013年度 No.1 2013年10月31日 編集発行：日本国際理解教育学会事務局

〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1 中央大学文学部 森茂岳雄研究室

TEL/FAX：042-674-3852 E-mail：jaie@tamacc.chuo-u.ac.jp Website：http://www.kokusairikai.com/

### 目次

会長挨拶	1	2012（平成24）年度収支決算書	10
第23回研究大会報告	2	2013（平成25）年度事業計画	11
第23回研究大会シンポジウム報告	3	2013（平成25）年度収支予算書	12
第23回研究大会特定課題研究報告	4	理事会報告（研究・実践委員会より）	13
第23回研究大会参加記	5	理事会報告（紀要編集委員会より）	13
スリランカスタディツアー報告	6	理事会報告（国際委員会より）	14
スリランカスタディツアー参加記	7	理事会報告（理事会・事務局）	14
博学連携教員研修ワークショップ報告	8	事務局通信	15-16
2013（平成25）年度総会報告	9		

## 【会長挨拶】

### 成果の継承と次世代にむけての創造—新たな3年間を迎えて—

会長 藤原 孝章

去る、7月6、7日の両日にわたって広島経済大学において開催された日本国際理解教育学会第23回研究大会総会にて、学会の新しい執行体制と今後の3年間（2013～2015年度）にわたっての方針が承認されました。

私は、大津和子前会長から新たに会長を引き継ぎました。多田、大津会長時代の6年間（2008～2013年度）は、米田会長時代6年間の会員諸氏の教育実践や研究の成果がまとめられ、出版物の形となって現れました。それは、国立民族学博物館との連携事業の成果物の一つである『学校と博物館でつくる国際理解教育—新しい学びをデザインする』（中牧弘允・森茂岳雄・多田孝志編、明石書店、2009年）であり、科学研究費による共同研究の成果物の一部である『グローバル時代の国際理解教育—実践と理論をつなぐ』（日本国際理解教育学会編、明石書店、2010年）でした。そして、昨年刊行された『現代国際理解教育事典』（日本国際理解教育学会編、明石書店、2012年）は、100名におよぶ執筆者全員が会員であり、学会としての一つの位置を社会に示し得たものと評価しております。学会誌『国際理解教育』も第16号（2010年）から出版元を明石書店に移し、装丁もあらたになりました。

会員諸氏の研究と実践に支えられた、学会のこのような活動は、学会の社会的責任でもあり、今後も継承すべきものと考えます。

その意味で、新たな3年間を迎えての学会の課題は、まもなく、これまでの成果の継承です。そのためにも、会員諸氏に資する学会運営が求められます。魅力ある研究大会とそれへの参加、発表、それらをふまえての学会誌の編纂など従来の運営を力強く行っていく必要があります。

次に、21世紀の教育的課題に対応した学会ならではの研究・実践活動の展開が求められます。そのためには、国際理解教育の国際的動向と国内の学校や社会の動向をふまえて、しかし時流や時勢を批判的に吟味し、グローバルな学習や地球市民の育成を目標とする基本を見据えていくことが必要です。日韓中共同研究で培ってきたネットワークをより実りあるものにする事も求められています。

以上のような課題に対して、学会運営組織としては、従来の研究と実践の委員会を統合した研究・実践委員会、国際委員会と紀要編集委員会の3つの委員会と事務局のもとに、新しく出発することにしました。また、理事以外の会員諸氏を新たに委員として迎えました。標題に「次世代にむけての創造」とした所以です。

新たな3年間は、学会をめぐる内外の状況を適確にとらえ、次世代にむけて新たな課題を創出していくことで、組織の新陳代謝をはかっていく時代としたいものです。

## 日本国際理解教育学会第23回研究大会報告

第23回研究大会実行委員長 田中 泉

日本国際理解教育学会第23回研究大会を、2013年7月6日(土曜)・7日(日曜)の日程で、広島経済大学を会場に開催しました。当日は、梅雨の末期ともいえる不安定な天気で、朝の来校時、および、学会終了時に豪雨の被害にあわれた方には、申し訳なく思います。皮肉にも、翌日には梅雨明けとなり、広島地方はこの日から真夏の太陽が照りつける酷暑の毎日から始まりました。

大会の2日間で自由研究発表、シンポジウム、懇親会(80名参加)、特定課題研究発表がありました。また、日本各地のみならず、韓国、中国からも含め、145名の方々にご参加いただきました。また、運営は、広島経済大学の教職員5名と学生スタッフ26名が当りました。この皆様に、大会実行委員長として、御礼申し上げます。

自由研究発表は、ESD、シティズンシップ、スタディツアー、マイノリティ、異文化・多文化、言語・日本語教育、英語教育、小・中・高の社会科教育、平和教育などの視点で12分科会57件の報告が行われ、各分科会とも活発な議論が行われました。このうち韓国国際理解教育学会からは、3名の会員に報告をいただきました。

シンポジウムは、「平和教育と国際理解教育」をテーマに行われました。当初のプログラムでは4人のパネリストの報告と田淵五十生先生による指定討論だけを予定していましたが、急遽、大津会長、藤原、森茂両副会長のご了解を得てDVD「はだしのゲンが伝えたいこと」を上映しました。このDVDは、マンガ『はだしのゲン』の作者で2012年の12月に亡くなった中沢啓治さんに広島の実相についてインタビューしたのですが、多くの参加者から好評をいただき、そのあとの4人のパネリストの報告についての理解がより深まったことと思います。このDVDをはじめ、中沢啓治氏関連の図書を展示していたブースでは、用意されたDVDが完売となったほか、このDVD制作を企画したトモコーポレーションの渡部久仁子さん(インタビューの娘さん)への問い合わせが殺到したようです。

特定課題研究では、藤原孝章先生をコーディネータとして「海外研修・スタディツアー」をテーマに、4件の実践報告が行われました。

一方、さまざまな問題もありました。まず、本来ならば小・中・高の現職教員の方が参加していただきやすいように広島県および広島市の教育委員会の「後援」をいただくことを希望していましたが、本大会についての当方の説明不足のせいか、結局は、広島県教育委員会からの「後援」ではなく「協賛」をいただくにとどまりました。このため

に参加が不可能になった現職教員の方にはご迷惑をかけたこととお詫びします。

また、参加申し込みを旅行業者に委託して、ウェブサイトを通じて行ったことです。参加申込を旅行業者に委託することや、ウェブサイトによる参加申込は、近年、多くの学会が採用していますが、今回の場合、入力方法が少し複雑で、戸惑われた方が多かったようです。業者に参加申込の事務を委託する利点は、運営の省力化のほか、参加費等の入金口座の管理および入金確認の容易さなどがありますが、経費がかかる割に効果は大きくなかったと思います。

末筆になりましたが、何かとご助言いただきました前回開催校の桐谷正信先生、前事務局の栗山丈弘先生に、御礼申し上げます。また、来年度の奈良教育大学での第24回研究大会が成功されることをお祈りいたします。



会場となった広島経済大学1号館



特定課題研究の会場

## 第23回研究大会シンポジウム報告

第23回研究大会実行委員長 田中 泉

今回の研究大会におけるシンポジウムのテーマは、「平和教育と国際理解教育」としました。もちろん、それは「人類最初の核兵器が投下された広島での開催」ということが大きな要因ですが、過去に開催された日本国際理解教育学会研究大会において平和教育を正面から捉えてシンポジウムを行ったことはないという背景もありました。当初、シンポジウムは4人のパネリストによる報告によって構成することを考えていました。まず、竹内久顕会員（東京女子大学）に、日本の平和教育を振り返っていただき、そこに見られる変遷過程と課題を提示していただいた後で、広島平和記念資料館学芸員の福島在行氏による同館の展示の方針について、地元広島の実践者として神垣しおり氏（広島ノートルダム清心中・高校）による中・高6か年を通じた平和学習について、そして最後に日本の平和教育を相対化するために卜部匡司会員（広島市立大学）によるドイツの平和教育について報告をいただく計画でした。

しかし、プロフラム発送後の6月初旬、広島市内で漫画『はだしのゲン』40周年の一連のイベントがあり、シンポジウムの参考になるのではないかと思い参加したのです。そこで、DVD「はだしのゲンが伝えたいこと」を視聴し、一種の衝撃を受けました。作者の中沢啓治氏が『はだしのゲン』の内容に沿って、振り返られたのですが、広島で生まれ育った私自身も聞いたことない被爆の実相があったのです。また、以前は被爆体験を自分の中に封じ込めていた中沢氏が『はだしのゲン』を書こうとした動機が、御母堂が亡くなり火葬した際に骨が残らなかったことで、後世の人びとに実相を伝える必要性を痛感したことにあるということを知りました。その後、このDVDをどうしてもシンポジウムで上映し、全国から集まった研究者・実践者に中沢氏の思いを知っていただいたうえで、子どもたちにこの漫画を読ませてほしいと感じました。そこで、プログラムになかったDVDの上映をシンポジウム冒頭に行った次第です。DVDは、漫画の場面と中沢氏の体験談を交差させながら進行していましたが、漫画の被爆者の様子が衝撃的かつ残酷であるのに対して中沢氏が淡々と話されるので、重々しいながらも説得力があり、視聴した参加者には深く心に残るものになったと思います。

DVD上映の後、まず、福島氏からは、今回のテーマを考えるうえでの広島平和記念資料館を被爆地に所在する平和をテーマとする博物館としての基礎的な情報を提示していただきました。また、現在展示内容を実物重視で、人の被害と都市の破壊がよくわかる内容に、展示内容をリ

ニューアルする取り組みを行っていることが報告されました。神垣氏からは、カトリック教育理念に基づき、人間と基本的人権を尊重するため、生徒との触れ合いを持ちながら一人一人の独自性・個性を理解しその能力を伸ばすことを目標に、「人権・平和学習」の中で「被爆地ヒロシマを学ぶ意義をしり、人との関わりを通して弱い立場の人びとのために生きる」ことや、「視野を世界に広げ国際社会の中で共に生きる」ことをめざし、様々な取り組みの中で生徒が主体的に活動している様子を報告していただきました。

休憩後、竹内会員からは、1970年代以降の日本の平和教育を90年代前半までの「昂揚期」と90年代後半以降の「低迷・混乱期」に分け、それぞれの特徴を明らかにしたうえで、国際理解教育系の平和教育の課題として「平和の問題を直接扱った事例が少ない」こと、「平和教育の位置づけが目的から手段に矮小化」されていることなど、国際理解教育と平和教育が分離されている状況を指摘していただきました。最後に、卜部会員からは、ドイツでは、学校教育の中では平和教育が行われていない実態が報告されました。その後指定討論者の田淵五十生会員（福山市立大学）のコメントとパネリストの応答、フロアとの若干の意見交換がありました。

末尾になりますが、貴重な報告をいただいた4名のパネリストおよび田淵先生に、この場を借りまして、深く感謝の意を表したいと思います。



パネリスト（左より、神垣、卜部、福島、竹内の諸氏）



【第23回研究大会「特定課題研究」報告】

海外研修・スタディツアーと国際理解教育

同志社女子大学 藤原 孝章

「特定課題研究」については、実質2年半であったが、今回の第23回研究大会（広島大会）にいたるまで、3回の公開研究会と2回の宿泊研修を重ね、報告するに至った。

1. 海外研修・スタディツアーをとりまく状況

一つは、学校の特別活動に位置づけられる修学旅行に「海外旅行」「海外研修」が増え、集団による一斉観光ではなく、課題をもった体験、交流の旅が求められつつある。二つ目は、NGOや大学などでスタディツアーや海外体験学習が増え、プログラム、参加者の学びの獲得やそのプロセスなどが課題になっている。三つ目は、私たちは、海外への関心の低下という、日本における若者の旅行意識の変容に直面している。四つ目は、学校教員は、JICAが実施している小、中、高等学校教員対象の「教師海外研修」など、海外研修に参加する機会があり、授業改善や教材開発のために活用している。

それぞれの状況において個別の体験や報告には優れたものがあるが、どのようなプログラムや内容を企画し、実践すれば成果があがるのか、参加者の学びがなぜ深いものになるのか、どのようにして学びが獲得されるのか、その契機は何なのか、検証をへたものは少ない。また、観光人類学などが明らかにしているように、スタディツアーもまた観光の一実践であり、ゲスト・ホスト論、交流・変容論などは、旅の経験を記述する行為への問いも依然としてある。そこで、本研究を、教育学、観光学、観光人類学をバックグラウンドとした「国際理解教育における海外研修・スタディツアー研究」と位置づけ、報告した。

2. 研究枠組みと研究分担—四つのアプローチ

広島大会では、私たちが到達した研究枠組みと4つのアプローチについて、図1「国際理解教育からみた海外研修・スタディツアー」をもとに報告した。

海外研修・スタディツアーは、他の旅行商品と同様に、日本を出国し、現地に到着してから、1、2週間ほどの見学、交流、体験などのプログラムをへて、帰国するという日程の中で行われる。私たちは、これを観光学の知見にもとづき、ツアーの企画運営主体（学校、大学、NGO、自治体、旅行会社など）、参加者（生徒、学生、教員など）としてのゲスト、受け入れ側（現地のコミュニティ、住民など）としてのホスト、そして実践内容としてのカリキュラム（プログラム）の四つの要素に分け、企画運営者が提供するカリキュラムをAのスタディツアー論、ゲストの観光経験、学習体験をBの学び（学習）論、ゲストとホストの交流や相互作用がもたらす生成的なカリキュラムをCの臨床的交流論、そしてゲストである教員の教材収集や教材開発の目的にそった研修の学びをDの教材・授業づくり論として、分析、考察した。

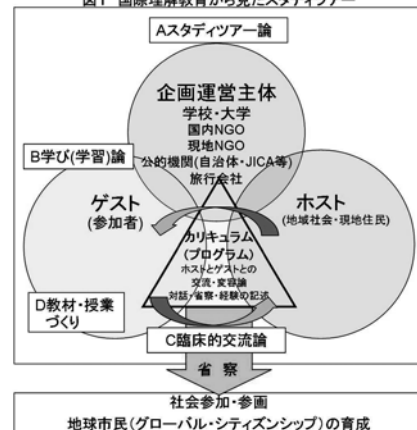
この枠組みの特徴は、(1)通常の報告書が参加者の体験学習の成果のみを記述するのに対し、観光学や開発教育が指摘しているように、ゲストとホストの二分論におわらない、両者の相互作用、交流の観点から分析をした点にある（C臨床的交流論）。次に、(2)「いってよかった」「出会いや

体験があった」「自分が変わった」という報告書にみる高揚感の主観性や旅行商品のキャッチコピーの中身を対象化し、学習変容論からとらえたこと（B学び論）、そして、(3)国際理解教育が育成すべき地球市民的資質のためにどのようなカリキュラム（プログラム）が必要とされるのかを考察したこと（Aスタディツアー論）である。その際、(4)海外研修・スタディツアーを教材開発や授業づくりに行かそうとする学校教員の立ち位置についてもふれたことである（D教材・授業づくり論）。

Aスタディツアー論は、藤原孝章、栗山丈弘が分担し、研修プログラムの内容やカリキュラムについて、ツアーの企画立案、実施者の側から考察した。B学び（学習）論は、居城勝彦、中山京子、織田雪江が分担し、学校教育機関が行う海外体験学習における学びとその変容について論じた。C臨床的交流論は、大滝修、津山直樹、森茂岳雄、橋崎頼子が分担し、海外研修、交流プログラムにおけるゲストとホストの相互関係や交流、生成する学びの意義を論じている。ゲストの変容を組み込んだ計画的なプログラムのあり方を反省し、ナラティブ・アプローチによる分析を通して、ゲスト・ホスト双方の相互作用・交流の場から生まれる学びの意義を論じている。D教材・授業づくり論は、金田修、松井克行、堀幸美、山中信幸が分担し、JICA教師海外研修について、報告書やアンケート調査から、現地情報の切り取り方、伝え方や教材づくりの課題を論じた。



図1 国際理解教育から見たスタディツアー



## 第23回研究大会参加記

中央大学大学院 鄒 聖傑

学部時代から国際理解教育に興味を持つようになり、将来研究者になる夢を持って、去年中国を離れ日本へ留学した。この度、初めて日本国際理解学会の研究大会に参加したが、全国各地の先生方の発表を聞くことが出来、自分の視野も広げることが出来た。

自由研究発表では、日中韓三国の研究者たちから平和教育、言語教育、シティズンシップの育成、日中韓相互理解など様々な視点による国際理解教育に関する最新の研究成果が提示された。その中でも中国人として私が最も興味を持った発表はやはり日中相互理解と中国における国際理解教育の展開である。とりわけ中国からお越しいただいた秦莉先生による、中国三つの都市における国際理解教育の実施現状を調査し、それらを比較された発表は、同じ中国の国際理解教育について研究を行う私にとって大変示唆的であった。

一方、今回の研究大会は世界最初の被爆地広島で開かれ、「平和教育と国際理解教育」をテーマとしてのシンポジウムでは、高校、大学の先生方と学芸員の方がシンポジストとしてそれぞれ平和教育の課題と実践について語られた。

私はまだ国際理解教育研究分野の新人である。今回の研究大会の参加を通じて、自身の研究分野についての視野を広げること、そして、今まで一度も考えていない視点を認識することができ、本当に刺激的な二日間となった。また、大会の合間を利用し広島市内にある原爆ドームと広島平和記念資料館を参観し、戦争がもたらす惨禍と痛みを深く感じると同時に平和教育の重要性を改めて認識した。今後は今回の研究大会で学んだ知見を活かし、国際理解教育の研究により一層励みたい。

最後に今回の研究大会を運営いただきました実行委員長の田中泉先生と広島経済大学の学生の皆様に心から敬意を表すとともに、深く感謝を申し上げます。

## 第23回研究大会参加記

北海道教育大学 金 玗辰

私は昨年度の埼玉大会に続いて2回目の参加であったが、本年度の広島大会でも様々な理論や実践を学び、国際理解教育に関する視野を広げることができた。以下、研究大会への参加から学んだことを簡単にまとめて、参加記としたい。

「平和教育と国際理解教育」というテーマのシンポジウムでは、まず「はだしのゲンが伝えたいこと」の上映があり、戦争なき平和への願いが改めて心に残った。ひき続き、平和教育と国際理解教育のあり方を説明した4つの発表があった。広島平和記念資料館の展示方針と学校教育・社会教育との関係、広島ノートルダム清心中・高校における6年間の平和学習の実践は、広島ならではの発表であり、身近な地域の観点から平和教育のあり方を考えることができた。また、「積極的」・「消極的」平和の概念から日本における平和教育の課題を指摘した竹内久顕先生の発表からは、平和教育の独自性および国際理解教育との関連性が大変参考になった。さらにドイツの平和教育に関する発表からは、自国中心ではなく人類の普遍的な概念としての平和教育を考えるために、数多くの国の事例から学ぶ必要性を感じた。

自由研究発表では、私も自由研究発表を行った。司会をして頂いた成田喜一郎先生からは、これまでのご自身の授業実践を紹介して頂くなど、貴重な助言を受けた。その他、普段から関心を持っていた日中韓の相互理解のための国際理解教育のあり方に関連する研究・実践報告を聞いた。例えば、韓国の「プンムル」を用いた音楽授業、中国人留学生による民族衣装に関する家庭科授業など、様々な教科における国際理解教育の実践研究は興味深いものであった。今回も中国や韓国からの参加・発表があったが、本学会には今後も日中韓における国際理解教育の関係者間の交流を一層期待する。そのために、通訳のいる報告では時間延長をしたり、英語で行う分科会を設置したりするなどの検討がなされることを望みたい。

## レジリエンスを学ぶ スリランカ・ESDスタディツアー報告

聖心女子大学 永田 佳之

昨年の豪州カンガルー島ESDスタディツアーに引き続き、本年もESDをテーマにしたスタディツアーを国際委員会として企画・実施しました。

昨年のトピックは「持続可能性（サステナビリティ）」でしたが、本年は、昨今の国際社会で注目されている「レジリエンス（しなやかな回復力）」をトピックとして掲げ、持続可能な社会を形成する際の鍵となる「レジリエンス」とは何かを体感できるスタディツアーを組んでみました。

主な訪問地は、スリランカ南部のゴール市です。当地は、世界遺産の街として知られていましたが、2004年12月に起きたスマトラ沖地震で甚大な被害を被った街としても知られています。今回のスタディツアーでは、ゴール市で震災当時、病院として機能した丘上のホテルを拠点に、学校や宗教施設を訪れ、地元教員へのインタビューを実施しました。その他、被災時に活躍した草の根の地元NGOのリーダーやスタッフ、市長、JICAスリランカ事務所長、教育大臣らにも会見する機会に恵まれました。さら

に、南部の観光の一環として、サファリや森の早朝ヨガ、アーユルヴェーダも体験し、スリランカを満喫した旅となりました。

ここでは、ツアーに参加されたお二人から感想を寄せて頂きましたので、写真と共に掲載します。なお、このツアーの報告書は2013年度中に学会ホームページで公開する予定です。



被災したゴール市公立小学校での生徒との交流



教育省での教育大臣との面会



## スリランカのスタディツアーに参加して

青山学院大学大学院 木戸 啓絵

2013年8月「レジリエンス（しなやかな強さ）を学ぶスリランカ・ESDスタディツアー」に参加し、ゴール、マータラ、ヤーラ、コロomboの4都市を訪問した。

2004年に起きたスマトラ島沖地震による津波で大きな被害を受けたゴールとマータラでは、学校の先生、地域のNPO団体、宗教リーダー、市長から、様々な視点でお話を聞くことができた。また、NPOの方々がお宅に呼んでくださり、様々な食材がふんだんに使われたおいしい手づくり料理や、ミルクとお砂糖たっぷりでコクのあるセイロンティーで、笑顔と共に温かく歓迎して下さったことも忘れられない。

ヤーラでは、地球環境やその場所に暮らす人々の生活を考えた運営方針のエココテージに宿泊し、ヨガや瞑想、サファリで野生の動物たちを見たり、川で泳いだりした。ゆったりとした時間が流れる中、キラキラと眩しいほどの日射し、木々の間からこぼれる優しい光、心地よい風、その土地のおいしく彩りのよい食べもの、ホスピタリティーあふれるコテージの方々、自然を生きる動物たちの姿、その全てがあいまって、私の頭も心も体も全てがほぐされ研ぎすまされたように感じた。五感を通して心と体に直接記憶されるような、貴重で大切な瞬間がたくさんつまったヤーラでの日々となった。

首都コロomboでは、教育関係の各省大臣、JICA事務所の所長さんともお話をさせていただき、この国の豊かさや課題と可能性に触れることができた。

私にとっては2度目のスリランカ訪問だったが、今回はレジリエンスやESDというキーワードを持って現地に入ったことで、より一歩踏み込んでこの国に触れることができた。人々との交流やツアーの仲間たちとの振り返りを通して「しなやかな強さとは」「持続可能な発展とは」「教育とは」といったテーマをあらためて考え直すことができた。

スタディツアーを支えてくださった先生方、現地の方々、国際理解教育学会の皆様にご感謝申し上げます。

## スタディツアー参加記

国際交流基金 夫津木 美佐子

2年前の東日本大震災も記憶に新しいが、自然災害は世界各地で起き、ある日突然、あまりにも理不尽に尊い命や安らげる場所を奪う。その被害に遭ってもなお、屈せず、しなやかな強さを持ち生きる人々がいるという。ぜひ会いに行きたい。そんな思いから8月4日から12日にかけてスリランカ・ESDスタディツアーに参加させていただいた。

初めて降り立ったスリランカは、心地良い風に椰子の木が揺れ、静かな波の音が優しく迎えてくれた。2004年スマトラ島沖地震により約4万人の死者を出した津波被害があったとは想像し難い、というのが最初の印象だった。

被害の大きかった南部ゴール市を中心としたツアーでは、被災した学校訪問をはじめ、被災時にリーダーシップを発揮したゴール市長や宗教リーダー、更には教育大臣といった多様なアクターとの意見交換だけでなく、エコハウスでの自然を感じながらのヨガやサファリ体験などスリランカを体感する充実した内容であった。

その中でも非常に印象深く残ったのは、コミュニティで活動する生き生きとした女性たちの笑顔である。HELP-Oという地域NGOは、津波の被害者状況を逸早く調査し、生計開発のために地域住民が融資を受けられるというコミュニティバンクを設立した。そこで働く女性たちも紛れもなく被災者。津波で失意のどん底に突き落とされたが、子どもの教育や生活のために融資を受けることができ、他の地域住民との交流を通して少しずつ前向きに生きようと思ったこと、以前は女性が社会で働く習慣は無かったが、コミュニティへの活動に家族も協力的になり、今では自身も責任を与えられ社会に認められたと思えること、辛い経験も笑顔で語ってくれた。想像を絶する津波さえもポジティブに捉えた女性たちの姿にまさに「レジリエンス」を感じた瞬間だった。自然災害をも乗り越える持続可能な社会を支えるのはコミュニティの強さなのだ。この気づきを与えてくれた全ての方々に感謝したい。

## 【博学連携教員研修ワークショップ報告】

### 学校と博物館でつくる国際理解教育 —センセイもつくる・あそぶ・おどる・たのしむ—

東京学芸大学附属世田谷小学校 居城 勝彦

2013年8月6日（火）、国立民族学博物館において博学連携教員研修ワークショップ2013 in みんなくが開催された。国立民族学博物館（通称：みんなく）を活用した国際理解教育の実践事例の紹介やワークショップを通して、国際理解教育における博学連携の可能性について考えるこの催しは、今回から本学会と国立民族学博物館との間で協定が結ばれたことで、より充実した内容となった。その充実ぶりを午前中の基調講演と午後のワークショップ、およびそのふり返りから述べる。

これまでセミナー室を会場としていた基調講演とMMP（みんなくミュージアムパートナーズ）による実践報告は、講堂に会場を移し、より多くの参加者を迎えられる態勢が整った。基調講演では、このワークショップの立ち上げから携わっている中山京子（帝京大学・国立民族学博物館客員教員）が「博学連携教員ワークショップ8年のあゆみ—センセイもたのしむ—」をテーマにこれまでの活動を総括した。「博物館を活用した国際理解教育」というテーマで2005年に始まったこのワークショップは、学校と博物館の連携だけではなく、学会との連携、さらには新しい学びをデザインすることも視野に入れて続けられてきた。今回を含めた9年間で51のワークショップが開かれ、ファシリテーター95人、国立民族学博物館教員59人、計154人が関わっている。また、参加者累計は今回で1000人を越えている。内容はもちろんだが、数を見るだけでもこの催しの充実ぶりがわかるだろう。講演の中では、2年前に学生としてワークショップに参加し、現在担任する学級で実践に取り組んだ大阪の小学校教員が、今の思いを語ってくれた。

午後は7つのワークショップが開催された。その中で私がファシリテーターとして関わった「歌と踊りで語りつぐ南の島の物語Ⅲ」について紹介したい。マリアナ諸島グアムの先住民チャモロの人々は、歌と踊りで創世物語や歴史

を伝えている。一昨年は創世神話を主な内容とした古典チャモロと呼ばれる踊りを取り上げた。昨年は、それにスペイン統治の影響を受けたスパニッシュダンスも内容として加えた。さらに、今回は現代の人々が好んで踊るチャチャも取り上げ、3種類の踊りを踊ることを楽しみながら、チャモロの人々がたどった歴史を体感してもらうことをねらいとした。オセアニア展示場の大型カヌーの前、足元には太平洋の島々が並ぶ地図という、まさに博物館ならではの環境で踊ること、そしてこの3年間で毎年異なる国立民族学博物館教員と展示制作者が、博物館だからこそ得られる知見を参加者に提供してくれたことが、このワークショップの醍醐味である。

120分にわたるワークショップを終えた参加者とファシリテーターは、それぞれの活動の共有化を目的としたカフェ懇談会へと集まった。ここでは、それぞれの活動内容の紹介や参加者の感想等が語られ、それらを総括する映像と講評が行なわれた。映像や文字による視覚化の工夫は、限られた時間での参加者同士の情報の発信と共有に効果的であった。

私自身、この9年間ワークショップのファシリテーターとして参加し続けている。自分にとっては、音楽と博物館展示を表現活動によって結びつけることを一貫したテーマとして、さまざまな活動内容を提示してきた。9年前の立ち上げから関わった人たちは、副題にあるように、センセイもつくる・あそぶ・おどる・たのしむことを意識し続けてきたはずである。しかしワークショップの充実とともに、提供する側のスタッフにもさまざまな考えを持つ人が増えてきた。10年目を迎える次回のさらなる発展に向けて、共通理解や新たな発想が必要なのもかもしれない。これは、常に現在と向き合う国際理解教育と重なる姿ではないだろうか。



カフェ懇談会での活動紹介 —おどる—



# 2013（平成25）年度総会報告

第23回を迎えた研究大会が広島経済大学にて7月6～7日に盛会に開催される中、2013年度の総会が開催され、2013～15年度新役員選出の報告、事務局移転にともなう規約改正、2012年度の事業報告・決算報告ならびに2013年度の事業計画・予算計画が審議され、承認されました。以下、2012年度の事業報告・決算報告と2013年度の事業計画・予算計画を紙面を借りて報告します。

## 2012年度（平成24年度）事業報告

### 1. 第22回研究大会開催

日本国際理解教育学会第22回研究大会は、埼玉大学教育学部を会場に2012年7月15日（日）・16日（月・祝）の2日間にわたって開催され、自由研究発表、公開シンポジウム、特定課題研究などのプログラムが実施された。参加者は、両日を通じて会員・非会員を含めて約230名であった。韓国国際理解教育学会からも10名の参加申込があった。自由研究発表では、2日間にわたって13分科会、65本の研究発表が行われ、韓国国際理解教育学会からは5本の研究発表があった。公開シンポジウムは「今こそ教科教育における国際理解教育を」「国際理解教育実践における新しい検証・評価の方法を探る」「シティズンシップからシティズンシップ教育へ」の三つのシンポジウムを同時並行で開催する形式を採った。特定課題研究は、「文化的多様性と国際理解教育」が実施された。

#### 【第22回大会】

- ・期 日：2012年7月15日～16日
- ・会 場：埼玉大学教育学部
- ・自由研究発表65題目
- ・シンポジウム A：「今こそ教科教育における国際理解教育を」  
B：「国際理解教育実践における新しい検証・評価の方法を探る」  
C：「シティズンシップからシティズンシップ教育へ」
- ・特定課題研究：「文化的多様性と国際理解教育」

### 2. 各委員会・事業報告

#### 1) 研究委員会

- ①特定課題研究プロジェクトの進捗状況
  1. 「持続可能な社会形成と教育—ESDの実践的基盤に関する総合的研究—」（代表：永田佳之）：学会誌『国際理解教育』Vol.18（2012年6月刊）に「特集」として研究成果を発表。
  2. 「文化的多様性と国際理解教育」（代表：横田和子）：2012年度（第22回）研究大会特定課題研究において発表し、学会誌『国際理解教育』Vol.19（2013年6月刊）研究成果を発表する。
  3. 「海外研修・スタディツアーと国際理解教育」（代表：藤原孝章）：合宿研究会（2012年12月）、公開研究会（2013年3月）を開催し研究を推進した。2013年度（第23回）研究大会特定課題研究において発表する。

- ②新規特定課題研究プロジェクト  
応募がなかったため、一般会員からの公募は、休止することとした。

#### 2) 紀要編集委員会

- ①紀要18号の刊行 明石書店より2012年6月に刊行された。
- ②紀要19号の編集・刊行  
紀要「国際理解教育」19号の刊行（第23回研究大会での配布）に向けての編集作業がおこなわれた。  
特集論文「文化的多様性と国際理解教育」、研究論文、18号から新たに設けた「実践研究ノート」、第22回研究大会シンポジウムや実践研究委員会による研究会、国立民族学博物館との博学連携教員研修、韓国国際理解教育学会の研究大会などの諸報告、海外の国際理解教育の動向、書評、新刊紹介などを掲載した。

#### 3) 実践研究委員会

- テーマ「国際理解教育の可能性を広げる—感性的アプローチに着目して—」
- ①第1回研究会  
期 日：2012年5月19日（土） 会 場：目白大学
  - ②第2回研究会（公開研究会）「感性的アプローチによる実践報告会」

期 日：2012年11月24日（土） 会 場：目白大学

#### 4) 国際委員会

- ①第1回海外スタディツアーの開催  
期 日：2012年8月15～24日（10日間）  
訪問地：オーストラリア（アデレード・カンガルー島）  
参加者：9名
  - ②国際的な教育動向の紹介  
紀要19号「トビリシ宣言：持続可能な未来に向けた今日の教育—解説と訳—」を掲載  
ニュースレター41・42号「『リオ+20』と『トビリシ+35』からの示唆」を掲載
- #### 5) 国立民族学博物館との共同事業
- ①博学連携教員研修ワークショップ2012 in みんなく「学校と博物館でつくる国際理解教育—新しい学びをデザインする—」  
期 日：2012年8月7日（火）  
会 場：国立民族学博物館  
内 容：〈第1部〉講演とミュージアムツアー  
〈第2部〉ワークショップ
  - ②「日本国際理解教育学会と人間文化研究機構国立民族学博物館との連携に関する協定」の締結（平成25年3月28日）
- #### 6) 20周年記念事業『現代国際理解教育事典』の刊行
- 日本国際理解教育学会編著 2012年6月5日 明石書店 A5版 330頁 4700円+税

### 3. 韓国国際理解教育学会への参加

韓国国際理解教育学会第13回大会「平和の文化、グローバルシティズンシップと国際理解教育」  
期 日：2012年11月10日（土）～11日（日）  
会 場：京仁教育大学校安養キャンパス  
本学会からの参加者：9名（内 自由研究発表5名 シンポジウム2名 ワークショップ1名）

### 4. 理事会開催

（常任理事会） 第1回：2012年4月14日（東京）  
第2回：10月13日（東京）  
（理 事 会） 第1回：2012年7月14日（埼玉）  
第2回：12月23日（東京）

### 5. 理事選挙の実施

選挙管理委員会 第1回：2012年8月24日（京都）  
第2回：10月28日（京都）  
投票期間：2012年10月1日～10月20日（当日消印有効）  
投票総数：101（投票率28.3%）

### 6. 事務局報告

- 1) 会報発行 第41・42号合併号（2013年3月）
- 2) 後援名義
  - ・グローバル教育コンクール2012（主催：外務省）
  - ・武蔵野市国際交流協会 夏期教員ワークショップ（主催：武蔵野市国際交流協会）
  - ・平成24年度国際教育セミナー（主催：財団法人大阪府国際交流財団）
  - ・第3回世界遺産学習全国サミット2012 in なら（主催：奈良市教育委員会）

以 上

## 平成24年度 日本国際理解教育学会収支決算書（平成24年4月1日から平成25年3月31日まで）

## I. 収入の部

科目	23年度決算額	24年度予算額	24年度決算額	備考
入会金	90,000	100,000	99,000	
年会費	2,978,000	3,300,000	2,702,000	
助成金	1,000,000	0	0	
雑収入	28,098	50,000	158,717	紀要・報告書販売・印税、利息
当期収入合計（A）	4,096,098	3,450,000	2,959,717	
前期繰越収支差額	2,588,530	3,658,529	3,658,529	
収入合計（B）	6,684,628	7,108,529	6,618,246	

## II. 支出の部

科目	23年度決算額	24年度予算額	24年度決算額	備考
<b>1. 事業費</b>	2,655,433	3,595,656	3,257,448	
大会運営補助費	400,000	400,000	400,000	25年度大会用（23回広島大会）
紀要委員会費	190,220	230,000	170,570	19号編集費
紀要刊行費	500,000	500,000	500,000	18号刊行費
会報刊行費	191,100	200,000	110,250	Vol. 41・42合併号刊行費
理事会費	331,585	400,000	416,100	理事会2回・常任2回
研究委員会費	436,721	519,279	317,570	委員会費 27,340円 横田P 71,350円 藤原P 218,880円
実践研究委員会	200,000	200,000	190,000	
国際委員会費	0	300,000	300,000	
国立民族学博物館との共同事業	72,184	80,000	78,308	
国際交流費	50,000	50,000	50,000	
学会賞	0	0	0	
20回大会記念事業	0	0	0	
20周年記念事業	283,623	716,377	724,650	事典編纂会議費・刊行費
国際企画事業費	0	0	0	
<b>2. 管理費</b>	370,666	630,000	411,707	
事務局経費	26,700	50,000	31,500	
人件費	62,000	80,000	48,000	紀要・ニューズレター発送アルバイト
名簿作成費	48,000	0	0	概ね3年に1度
通信費	96,920	170,000	110,260	紀要・ニューズレター郵送費
設備・備品費	0	10,000	0	
消耗品費	6,416	20,000	16,113	事務用品
会議費	45,200	30,000	15,435	理事会会場使用料
旅費交通費	78,920	80,000	75,320	監査旅費・理事会準備旅費など
印刷製本費	0	50,000	0	封筒印刷費
雑費	6,510	10,000	5,985	振込手数料
選挙管理委員会費	0	130,000	109,094	
<b>3. 予備費</b>	0	40,000	0	

	23年度決算	24年度予算	24年度決算
当期支出合計（C）	3,026,099	4,265,656	3,669,155
当期支出差額（A）－（C）	1,069,999	▲815,656	▲709,438
次期繰越収支差額（B）－（C）	3,658,529	2,842,873	2,949,091

2013年度（平成25年度）事業計画

1. 全体方針

- ① 会員に資する学会運営および学会組織の改善
- ② 21世紀の教育的課題に対応した研究・実践活動の展開
- ③ 海外の関連学会・団体、国内の関連組織との連携の強化
- ④ 学会の財政の安定化に向けて、会員の拡大および会費納入の促進
- ⑤ 会員の研究・実践活動への支援および活動機会の拡大
- ⑥ 研究の機会拡大に向けて、外部資金獲得のための積極的な活動の展開

2. 各委員会等の事業計画

(1) 研究委員会と実践研究委員会を統合、研究・実践委員会の新設

- ① 特定課題研究プロジェクトの推進  
「海外研修・スタディツアーと国際理解教育」（代表：藤原孝章）：2013年度（第23回）研究大会特定課題研究において発表。学会誌『国際理解教育』Vol.20（2014年6月刊）に「特集」として研究成果を発表予定。
- ② 研究・実践委員会 第1回公開研究会の開催  
日程：9月28日（土）10:30～16:00  
会場：椙山女学園大学附属小学校（名古屋市千種区星が丘元町17-3）  
内容：午前…授業公開 午後…研究協議会  
連絡先：椙山女学園大学附属小学校 052-751-5451（校長：宇土、教頭：松原）  
宇土泰寛 uto@sugiyama-u.ac.jp

(2) 紀要編集委員会

紀要20号の刊行にむけた編集委員会を4回開催し、投稿論文および特定課題論文の査読を行う。また、紀要20号以降の増ページに関する覚え書きを明石書店と作成予定。

- ・ 会員からの論文投稿募集
- ・ 論文締切：2013年9月30日必着 事前エントリーは、今回から廃止。
- ・ 投稿規定：学会ウェブサイトに掲載
- ・ 紀要編集委員会事務局  
〒338-8570 さいたま市桜区下大久保255 埼玉大学教育学部 桐谷正信研究室気付  
Tel & Fax : 048-858-3193 e-mail : kiritani@mail.saitama-u.ac.jp

(3) 国際委員会

- ① 海外スタディツアーの実施  
「レジリエンスを学ぶスリランカ・ESDスタディツアー」  
日程：2013年8月  
訪問地：スリランカ（コロンボ及びゴール市）  
概要：現地を訪問し、教師たちへのインタビューや現地の人々との交流を通して、学校とレジリエンスについて考える。  
定員：8名程度
- ② 国際的な教育動向の紹介  
「ESDの10年」の最終年に向けた最新の国際情勢や、昨年度に引き続き「サステイナブル開発目標」に関する情報の提供など、学会誌等を通して会員に届ける。
- ③ 第13回 韓国国際理解教育学会への参加  
日程：2013年11月9日（土）～11月10日（日）  
会場：全北大学校 Chonbuk National University（全州）  
テーマ等：未定  
募集：学会ウェブサイトにて詳細がわかり次第掲載。

(4) 事業

国立民族学博物館との共同事業 博学連携教員研修ワークショップ 2013 in みんぱく「学校と博物館でつくる国際理解教育：センセイもつくる・あそぶ・おどる・たのしむ」  
日時：2013年8月6日（木）10:20～17:00  
会場：国立民族学博物館  
内容：講演 ミュージアムツアー ワークショップ等  
申込：kokusairikai@bunka.ac.jp（日本国際理解教育学会事務局）

3. 2014年度（平成26年度）第24回研究大会への準備

開催日程：2014年6月14～15日（予定）  
開催会場：奈良教育大学  
実行委員長：加藤 久雄  
実行委員会担当：中澤 静男

4. 教育関連学会連絡協議会への加入

以上

2013-15年度 日本国際理解教育学会 役員・委員・事務局・各委員会・事業分担

【役員】

会長	藤原 孝章		
副会長	中山 京子	森茂 岳雄	
常任理事	大津 和子（北海道教育大学）	永田 佳之（聖心女子大学）	
	中山 京子（帝京大学）	藤原 孝章（同志社女子大学）	
	嶺井 明子（筑波大学）	森茂 岳雄（中央大学）	
理事	伊井直比呂（大阪府立大学）	石森 広美（宮城県仙台東高等学校）	
	井ノ口貴史（京都橘大学）	今田 晃一（文教大学）	
	宇土 泰寛（椙山女学園大学）	釜田 聡（上越教育大学）	
	桐谷 正信（埼玉大学）	栗山 丈弘（文化学園大学）	
	田淵五十生（福山市立大学）	成田喜一郎（東京学芸大学）	
	森田 真樹（立命館大学）	山西 優二（早稲田大学）	
監事	吉村 雅仁（奈良教育大学）	渡部 淳（日本大学）	
	田尻 信壹（共立女子大学）	松尾 知明（国立教育政策研究所）	

【委嘱委員】

居城 勝彦（東京学芸大学附属世田谷小学校）
市瀬 智紀（宮城教育大学）
織田 雪江（同志社中学校・高等学校）
姜 英敏（北京師範大学）
杉田かおり（筑波大学）
林 敏博（名古屋市立蓬来小学校）
丸山 英樹（国立教育政策研究所）
南 美佐江（奈良女子大学附属中等教育学校）

【顧問】

米田 伸次	多田 孝志
-------	-------

【事務局】

事務局長	森茂 岳雄		
事務局次長	福山 文子（中央大学）		
ホームページ	今田 晃一		
ニュースレター	栗山 丈弘		

【委員会・各種事業】 ◎は委員長 ○は副委員長

研究・実践委員会	◎嶺井 明子	○大津 和子	井ノ口貴史	宇土 泰寛
	杉田かおり	林 敏博	山西 優二	渡部 淳
紀要編集委員会	◎中山 京子	○桐谷 正信	石森 広美	今田 晃一
	成田喜一郎	松尾 知明	森田 真樹	
国際委員会	◎永田 佳之	○釜田 聡	伊井直比呂	市瀬 智紀
	姜 英敏	田淵五十生	丸山 英樹	南 美佐江
	吉村 雅仁			
民博事業	◎中山 京子	森茂 岳雄	居城 勝彦	織田 雪江
出版事業	常任理事			



## 平成25年度 日本国際理解教育学会収支予算書（平成25年4月1日から平成26年3月31日まで）

## I. 収入の部

科 目	24年度決算額	25年度予算額	備 考	24年度予算額
入会金	99,000	100,000		100,000
年会費	2,702,000	3,300,000		3,300,000
助成金	0	0	公文国際奨学財団	0
雑収入	158,717	100,000	紀要販売等	50,000
当期収入合計 (A)	2,959,717	3,500,000		3,450,000
前年度繰越収支差額	3,658,529	2,949,091		3,658,529
収入合計 (B)	6,618,246	6,449,091		7,108,529

## II. 支出の部

科 目	24年度決算額	25年度予算額	備 考	24年度予算額
<b>1. 事業費</b>	3,257,448	3,000,000		3,595,656
大会運営補助費	400,000	400,000	26年度・24回大会用	400,000
紀要委員会費	170,570	230,000	20号編集費	230,000
紀要刊行費	500,000	500,000	19号刊行費	500,000
会報刊行費	110,250	190,000	Vol.43,44刊行費	200,000
理事会費	416,100	700,000	理事会3回 常任3回	400,000
研究委員会費	317,570		統合	519,279
実践研究委員会	190,000		統合	200,000
研究・実践委員会		500,000	藤原P 100,000 公開研究会・会議費・その他 400,000	新規
国際委員会	300,000	300,000		300,000
国立民族学博物館との共同事業	78,308	100,000		80,000
国際交流費	50,000	50,000		50,000
学会賞	0	30,000	授与年度	0
20周年記念事業	724,650	0	終了	716,377
<b>2. 管理費</b>	411,707	470,000		630,000
事務局経費	31,500	40,000		50,000
人件費	48,000	60,000		80,000
名簿作成費	0	0		0
通信費	110,260	150,000		170,000
設備・備品費	0	30,000	プリンター	10,000
消耗品費	16,113	20,000	プリンタインク、宛名ラベル等	20,000
会議費	15,435	30,000	会場借料	30,000
旅費交通費	75,320	70,000		80,000
印刷製本費	0	50,000	封筒印刷代	50,000
教育関連学会学会連絡協議会年会費		10,000		新規
雑費	5,985	10,000	振込手数料	10,000
選挙管理委員会費	109,094	0	終了	130,000
<b>予備費</b>	0	30,000		40,000
当期支出合計 (C)	3,669,155	3,500,000		4,265,656
当期支出差額 (A)－(C)	▲709,438	0		▲815,656
次期繰越収支差額 (B)－(C)	2,949,091	2,949,091		2,842,873

## 研究・実践委員会報告

筑波大学 嶺井 明子

研究・実践委員会は、これまでの研究委員会と実践委員会を発展的に統合し、今年度から新設された委員会です。そこで本委員会の基本コンセプトを確認しつつ、2013-2015年度の活動計画を慎重に検討しております。

### 1. 新設「研究・実践委員会」の基本コンセプト

①研究委員会と実践委員会の統合のねらいは、より深い学びのため学会発足当初からの理念である理論と実践の統合を図ることにある。

②教育実践委員会発足当初の目的の一つである「地方各地における国際理解教育の普及」を継承して、東京以外の各地で研究・実践委員会主催のセミナーを開催する。

### 2. 今期（2013-2015年度）の共通テーマの設定

「国際理解教育における教育実践と実践研究」を共通テーマとして設定した。

### 3. 学会紀要との関係の整理

①従来、研究委員会が公募した特定課題研究プロジェクトの成果を、研究委員会が査読し、「査読付き」の論文として、学会紀要に掲載してきた。研究委員会が「研究・実践委員会」に発展的に解消されたこと、一般公募の課題研究プロジェクト方式の休止（応募ゼロの状態のため）があり、こうした方式は廃止する。

②一般公募の特定課題研究プロジェクトの最後である「海外研修・スタディツアーと国際理解教育」（代表：藤原孝章）は、2012年7月の広島経済大学における大会で研究成果の報告がなされた。同プロジェクトの学会紀要への掲載は、従来通り「査読付き」とするが、「研究委員会」が存在しないことから、紀要編集委員会が査読を行うこととする。

③これまでは特定課題研究プロジェクトのタイトルが学会紀要の特集テーマとなっていた。今後は、プロジェクト方式の廃止にともない、「研究・実践委員会」の研究活動の学会紀要への成果報告のあり方について、理事会、紀要編集委員会、国際委員会等と広く情報・意見交換しながら早急に検討する。

### 4. 2013年度の公開研究会の開催

広島大会で広報した通り、2013年9月28日、名古屋市 の椋山女学園大学附属小学校（校長：宇土泰弘）において開催した。詳細は学会のホームページ参照。

### 5. 『グローバル時代の国際理解教育』改訂版を作成する場合

研究・実践委員会としても検討に参加し、常任理事の 大津、嶺井が常任理事会に意見を伝える。

### 6. 今後の会議等の開催予定

2013年11月24日（日） 委員会の開催（於：東京）

## 紀要編集委員会報告

帝京大学 中山 京子

紀要19号を2013年6月20日付けで刊行することができました。特定課題論文をのぞいて、研究論文が12本、実践研究論文が5本、実践研究ノートが1本の合計18本の投稿があり、掲載は5本となりました。これに、特集「文化的多様性と国際理解教育」に関する論文が加わりました。紀要刊行にご協力いただきましてありがとうございます。9月末をもって20号への投稿が閉め切られ、新たな編集委員会体制で、査読、編集作業が始まります。20号の特集テーマは「海外研修・スタディツアーと国際理解教育」です。毎号、質の高い論文の投稿があり、紀要のページ数の制約から少ない本数しか掲載できず残念に思うことがありましたが、20号はもう1本増やすことができそうです。

編集委員として3年、副委員長兼編集委員会事務局3年を経て、22号まで編集委員長をつとめさせていただくこととなりました。明石書店から4号がすでに刊行されました。皆様の論文にかける思いや願いに誠実に向き合い、ていねいに編集作業を進めていきたいと思っております。新編集委員会は、桐谷正信（副委員長）、石森広美、今田晃一、成田喜一郎、松尾知明、森田真樹（敬称略）で構成されています。どうぞ宜しくお願いいたします。

新体制に入り、早速、桐谷委員と今田委員の労により、HP上の紀要のサイトがわかりやすくなり、また、2号以降の英文タイトルと16号以降の日本語目次がサイトに掲載されました。一度サイトを閲覧してみてください。

創友社から刊行されたバックナンバーの割引セット販売を学会事務局にて受け付けています。ご希望の方は学会事務局jaie@tamacc.chuo-u.ac.jpまでお問い合わせください。



## 国際委員会報告

聖心女子大学 永田 佳之

新たに発足した国際委員会では、昨年度からの準備期間を経て本年度より本格的な活動をはじめました。広島での第23回研究大会に合わせて開催された第1回会合にて、国際情報の収集・発信ならびに国内外のスタディツアーを2本の柱に据えることが、当面、この委員会に期されるミッションであることを再確認し、一連の活動をスタートさせました。また、東アジアの昨今の情勢に鑑み、学会ならではの貢献ができるように近隣諸国とのパイプを強化するという指針も共有しました。

具体期には、昨年度より本学会会員が参加した政府間会合の翻訳を解説付で学会誌に掲載したり、最近の重要な世界の教育開発をめぐる動向をニュースレターを通して現場等に伝えたりすることを通して、情報の収集・発信に務めています。国内外のツアーについては、昨年度、試行的に実施した海外スタディツアーの成果と課題を踏まえて、第二弾として「レジリエンス（しなやかな回復力）」をテーマにスマトラ沖地震で甚大な被害を被ったスリランカの世界遺産の街、ゴール市やコロンボを訪れ、被災地支援に取り組む市民活動家や教師から同国教育大臣に至るまで現地の人々と交流を重ねました（報告書は2013年度中に学会ホームページで公開予定）。近隣諸国との交流の強化については、北京市内の小学校または中学校と日本の学校との交流の「架け橋」役を学会ならではの国際貢献としてできないか、と様々な可能性を探っているところです。

なお、「国連ESDの10年」の締めくり会合（ESDに関するユネスコ世界会議）の1年前となるこの秋に「日本のESDを捉え直す～国際的な潮流から見た実践・研究・政策課題～」と題した公開学習会を開催し、80名以上の方々が学び合いの機会をもちました（詳細は、次号のニュースレターで紹介する予定）。

今後も、ニュースレターや学会誌、または学習会や国内外ツアーを最大限に活かして、現場の先生を含む学会員が世界の大きな潮流（うねり）を実感してもらう機会をさらに創出していきたいと考えています。

## 理事会報告

事務局

2013年度の第1回の常任理事会および理事会が、2013年3月24日（日）に、中央大学駿河台記念館にて開催されました。13時から開催された常任理事会では、新旧の常任理事7名および新旧事務局2名が出席し、2013年度の新体制、2012年度事業報告および決算、2013年度の事業計画および予算について審議いたしました。

つづいて15時から理事会が開催され、新理事18名、23回大会実行委員長、新旧事務局2名の計21名が出席しました。新体制については、従来の研究委員会と実践研究委員会を統合し、研究・実践委員会を新たに設け、研究・実践委員会、紀要編集委員会、国際委員会の3つの委員会体制を敷くこと。また、各委員会に理事以外に数名会員を「委員」として加えることが、藤原会長から提案され、承認されました。そして、20名の理事の委員会の分掌も承認され、委員会にわかれての今後の計画が話しあわれました。23回研究大会については、シンポジウムのテーマを「国際理解教育における平和教育の課題」とし、コーディネーター、コメンテーター、シンポジストのメンバー構成について報告されました。24回大会大会は、奈良教育大学にて開催することが決定しました。この他、今年度の韓国国際理解教育学会の開催、教育学関連学会連絡協議会結成総会、研究奨励賞（学会賞）等の報告がなされました。

2013年度第2回の理事会は、第23回研究大会にあわせて2013年7月5日（金）に広島経済大学立町キャンパスにて開催されました。藤原会長、森茂副会長、中山副会長をはじめ、理事20名と23回大会実行委員長の田中泉会員、24回大会実行委員会の加藤久雄会員、中澤静男会員、事務局1名を含め24名が出席しました。主たる議題は、翌日の総会に諮る2012年度事業報告、決算報告、2013年度の事業計画、予算案の審議でした。また理事会に先立ち、会合を持った委員会もあり、新体制下での今年度および今後3年間の事業計画について話し合わせ、委員会報告では、その討議の結果が報告されました。

新体制での課題としては、旧体制での研究委員会実施していたプロジェクト方式の研究が見直されたことに伴う、特定課題研究のあり方や、紀要での特集の組み方など、3つの委員会間での横断的な議論と調整が出てきたことでした。この件に関しては、継続審議となりました。



# 事務局通信

## 日本国際理解教育学会 第24回研究大会のお知らせ

- 開催日時：平成26年6月14～15日  
 開催会場：奈良教育大学（奈良市高畑町）  
 実行委員長：加藤 久雄 会員

## 寄贈図書

- 松尾知明編 『多文化教育をデザインする－移民時代のモデル構築－』 勁草書房 2013年
- 日本環境教育学会編 『環境教育事典』 教育出版 2013年
- 原沢伊都夫 『グローバルな時代を生きるための異文化理解入門』 研究社 2013年

### ◆会員の図書・文献寄贈のお願い

会員の皆様の関わられました文献・図書・報告書・教材など、また、会員の所属する学校での紀要等がございましたら、学会にご寄贈ください。

## 新入会員

以下の14名が2013年10月10日までに入会を承認されました。

氏名	所属	氏名	所属
山本 真弓	大阪府河内長野市立長野中学校	石坂 広樹	鳴門教育大学
佐藤 美和	立教大学大学院	阿波根寛英	奈良県香芝市立香芝中学校
村田 晶子	関西大学国際教育センター	加藤 久雄	奈良教育大学
半田 彩実	上越教育大学	鶴野紗也夏	東京大学大学院
神 直子	NPO法人 ブリッジ・フォー・ピース	今野 良祐	筑波大学大学院
佐々木正徳	東京工科大学	生田 祐子	文教大学
高井 延子	大阪府東大阪市立弥刀小学校	小林 邦子	近大姫路大学

## 事務局からの連絡とお願い

### ◆事務局移転のお知らせ

2013年7月より、事務局が下記所在地に移転いたしました。

日本国際理解教育学会事務局

〒192-0393 東京都八王子東中野742-1 中央大学文学部 森茂岳雄研究室

TEL/FAX 042-674-3852 E-mail : jaie@tamacc.chuo-u.ac.jp

### ◆年会費納入のお願い

当学会の活動は会員の皆様の会費でまかなわれております。今年度までの年会費未納の会員は会費をお支払いくださいますよう宜しくお願いいたします。

●会費：正会員8,000円 学生会員4,000円 団体会員30,000円

●郵便振り込み：口座番号 00120-5-601555 加入者名 日本国際理解教育学会

### ◆住所・所属等変更連絡のご協力をお願いします

事務局からの郵送物が「転居先不明」で返送され、また、会員のみなさまへのご連絡が滞ってしまっている場合が少なからずあります。所属変更によるお引っ越しなどで住所・所属等に変更がありましたら、ファックス（042-674-3852）または、Eメール（jaie@tamacc.chuo-u.ac.jp）でお知らせください。また、会員種別の変更もお知らせください。

### ◆紀要『国際理解教育』バックナンバーの購入手続きについて

明石書店から発行されております16号、17号、18号、19号はお近くの書店にてご購入可能です。2号～15号までは、事務局にて販売しておりますが、在庫が僅少の号も出始めております。セットでの割引販売もあります。

ご希望の号数および冊数をファックス（042-674-3852）またはEメール（jaie@tamacc.chuo-u.ac.jp）で事務局までお知らせください。振り込み用紙をお送りいたします。会員の皆様には、会員価格でお求めいただけます。

### ◆学会ホームページのご案内

研究大会やワークショップなどの情報をご覧いただけます。英語版ページもございます。アドレスは次のとおりです。

<http://www.kokusairikai.com/>

## 編 集 後 記

今号より、本誌の編集担当が変わり、紙面デザインをリニューアルしました。皆様により親しまれる会報にしたいと思いますので、宜しくお願いいたします。

会報編集担当 栗山 丈弘（文化学園大学 kuriyama@bunka.ac.jp）